



Title	円地文子「二世の縁 拾遺」論：作中口語訳「二世の縁」の再検討
Author(s)	齊田, 春菜
Citation	研究論集, 23, 51 (右) -64 (右)
Issue Date	2024-01-25
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgshhs.22.r51
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/91120
Type	departmental bulletin paper
File Information	26_rjgshhs_23_p051-064_r.pdf



円地文子「二世の縁 拾遺」論——作中口語訳「二世の縁」の再検討

齊 田 春 菜

要 旨

本稿は、円地文子「二世の縁 拾遺」（以下、「拾遺」と略す）の作中口語訳と語り手の「私」を軸にテキストを読み解くものである。

作中口語訳とは、「拾遺」に挿入されている上田秋成『春雨物語』「二世の縁」の「口語訳」（三三〇頁）を指す。「拾遺」の大きな特徴の一つとして「二世の縁」の全訳が叙述されている。これは定助の性への執着を強調した加筆として原文との比較を中心に研究がなされてきた。「拾遺」研究では、原文「二世の縁」を基本的に「仏教批判」と理解している。そのため先行研究は、仏教批判の物語である原文「二世の縁」から定助の性への執着の物語として作中口語訳を位置付けている。

しかし、この位置付けには二つの問題がある。一つ目は、そもそも原文の「二世の縁」が「仏教批判」の物語なのであるうかというものである。二つ目は、定助の性への執着を強調する加筆が、主に里の主人や村人たちのセリフと会話から読み取れるものであるにも係わらずそのことについては注意が払われていない点である。そのためまず原文「二世の縁」の先行研究を参照し、原文「二世の縁」解釈の検討を行い、「拾遺」研究の原文「二世の縁」理解についての更新を行った。この原文の検討の結果を踏まえ、定助の性への執着とは、主人や村人たちが構築したものであることを明らかにした。

加えてこの主人や村人と定助の関係は、「私」と布川の関係と一面において相似形であるといえる。ただし、布川は定助と異なり一方的に「私」に規定されるだけの存在ではない。「私」と布川は双方向的な関係でもある。この「私」と布川とのやり取りの間におかれているのが作中口語訳である。そのためこれも何らかの形で「私」に影響を与えていることを明らかにした。口語訳に対する「私」の語りと実際の作中口語訳の叙述のズレを考察し、「私」の語りが二重化していることを明らかにした。この二重化は、統一されることなく「子宮がどきりと鳴った」（三四〇頁）以降からテキストの幕切れまでそのままであった。したがって本稿は、原文「二世の縁」と作中口語訳の関係を再考し「拾遺」を「私」の語りの二重化について表象したテ

クストとして結論付けた。

はじめに

円地文子「二世の縁 拾遺」(以下「拾遺」と略す)は、一九五七年一月に『文学界』で掲載され、同年九月に同作を含む一〇作が単行本『妖』(文芸春秋新社)に初収された円地の代表的な作品の一つである。書肆に勤める「戦争未亡人」(三三四頁)の「私」が、病気で原稿の自筆ができない「旧師」(三三〇頁)布川の口述筆記を行うため自宅に行き、その後そこから帰宅するために駅に向かうまでの半日を一人称の語りで叙述している。その日「私」は、『春雨物語』「二世の縁」の口述筆記を布川の家で行った。その帰り道で夫のようにも布川のようにも感じた見知らぬ男に「私」は襲われたが、その場から逃げて駅へ走った。改札口から出て来た人々をみて「入定の定助がこの男たちの中に生きていることを私は確かめた」(三四二頁)のだった。

「拾遺」の大きな特徴の一つは上田秋成『春雨物語』(一八〇八年)「二世の縁」の全訳の口語訳が挿入されている点である。初出に記載された円地の「追記」によると「この作品中に引用した秋成作「二世の縁」は作者の敷衍した箇所が多く、原作のまゝの口訳ではありません」と説明がある。例えば田中愛のように「拾遺」の作中口語訳「二世の縁」は、「一般に「仏教批判」を主題とした作品として見られている「二世の縁」から、「性への執着」という要素を拾い上げ、

前面へと押し出した」²。内容として理解されている。具体的には、布川の口語訳を聞いた「私」は「二世の縁」の定助について、「前の生活で果せなかった性への執着だけをともかくも一人の女の身体をかりて果す」(三三九頁)と語っている。つまり「私」は、「二世の縁」の定助が性に執着していると理解している。また、実際に原文と作中口語訳「二世の縁」を比較した亀井秀雄などの研究者たちによっても「拾遺」に挿入された口語訳「二世の縁」は「もっぱら性への執着という点が強調されている」³と論証されている。なお円地は原文「二世の縁」を「性への執着」として解釈している⁴。

確かに定助の性については、作中口語訳の中で原文から追加がなされている。しかし先行研究は、「拾遺」の口語訳「二世の縁」がどのように原文よりも性に重点をおいたのか、という点については見過ごしてきた。つまり、定助の性がどのように口語訳によって加筆されたのか、あるいはどのように語られているのかについてはあまり注目がなされていないのである。実際に作中口語訳を確認してみると、里の主人や村人たちが定助について会話をしたり、噂をしたりすることによって、定助の性的な側面が強調されているに過ぎないのである(後述)。

以上のように作中口語訳の物語内容は、定助の性への執着が前景化したと一見いえる。ただし、その加筆は主人や村人たちがそのように語っているというものである。これまでその物語内容と物語言

説のズレについて今まで言及されてこなかった。まずは、そのことについて一節と二節で論証を行う。

続く、三節と四節では、「私」の語りの二重化について考察していく。この二重化は、布川が口語訳を「語りはじめた」(三三〇頁)と「私」が語る部分と実際の作中口語訳の叙述がズレることを契機に生じた。作中口語訳と語りの関係から「私」には、物語内容を語る「私」と物語言説を語る「私」という二重化が生じていることを明らかにする。そしてその二重化は、統一することなく、「恥ずかしい幻覚」(三四二頁)の場面からテキストの末尾まで継続する。

以上の点を踏まえ本稿は、「拾遺」に挿入されている作中口語訳「二世の縁」が、従来定助の性への執着という面を強調して、テキストの中に導入された、という先行研究の理解を再考することを試みるものである。そして「私」の語りが分裂し、二重化していくあり方についても明らかにしたい。

一、上田秋成「二世の縁」と作中口語訳の比較 (一)

「はじめに」で確認したように作中口語訳「二世の縁」は、原文にあった「仏教批判」の物語から定助の性への執着として書き換えられた物語として「拾遺」研究の中では理解されてきた。

しかし、そもそも原文「二世の縁」は「仏教批判」を主題としているのだろうか。飯倉洋一¹⁾は、「二世の縁」の読まれ方として「仏法の無意味さを説いた仏教批判を主題とする物語」か「晩年の秋成

自身の生と関連づけられて秋成の人間観を示した物語」と先行研究をまとめた。その上で飯倉はこれらとは違った観点を提出した。飯倉は「二世の縁」におけるいわゆる仏法という幻想の崩壊劇はこの主人(里)の主人を指す——引用者注)の独断的な解釈が基盤となっていることは注意されてよい」と述べ、里の主人の言動に注目する。そして、「入定者は現世への執着によって蘇り、その執着が露呈することで彼の尊厳性が失われる」という近世的な説話の話型が「二世の縁」では主人によって先取りされ、「むしろそういう愛欲因果譚の枠組みの中に、この蘇生者が最初から位置付けさせられていることを示しているのではないであろうか」と指摘する。その上で「二世の縁」を「愛欲因果譚としての入定蘇生説話を主人公が中心となつて里人たちが再現する〈物語〉(一種のメタフィクション)という枠組みを持っている」と結論づける。

飯倉の「二世の縁」を「〈物語〉(一種のメタフィクション)」と解釈する視点は、「拾遺」研究の中で理解されてきた原文「二世の縁」の解釈を見直す契機となる。そしてこれまでの研究における「拾遺」の解釈を更新できるのではないだろうか。例えば定助の性への執着は主人や村人らが勝手に付与したと解釈できる口語訳の加筆がある。言い換えると里の主人や村人らによって定助は性に執着があるという〈物語〉を押し付けられたのである。作中口語訳は、そのような様子を加筆という形で徹底し、強調したのである。

つまり、「拾遺」の作中口語訳「二世の縁」読みのレベルは二つあるのではないだろうか。一つ目は、「私」の解釈であり、従来の解釈

である定助は性に執着しているというものである。二つ目は口語訳で示された定助の性への執着は、主人や村人らが勝手に定助に付与した性質であるというものである。これは飯倉が指摘した原文にある「物語」（一種のメタフィクション）という枠組みを参照すること、主人や村人によって定助は性に執着があるという「物語」を押し付けられたと考えることができる。そしてそのあり方が口語訳によって強調され、露呈されたのが作中口語訳「二世の縁」で見逃されてきた解釈だといえる。

作中口語訳と原文の具体的な比較は二節で行うが、その準備として次の飯倉の指摘を参考にする。

先にも述べたように、この男は、主人の風雅文事の領域に不純なものとして認定されたために、主人によって掘り起こされ、蘇生させられているのであって、彼が聖性を持つていなければならぬ。ない謂われはないし、また実際、彼がもともと高僧であつたかどうかさえもわからないのである。つまり、彼は蘇生して「しるし」を発揮する立場も責任もないし、むしろ、なお統いていたかも知れない土中の行を強制的に中断させられた被害者であつたかもしれないのである。⁷

確かに飯倉が指摘するように定助が「高僧であつた」という根拠は原文にない。その一例として原文「二世の縁」は、村の人々の仏教の信仰が崩壊していく場面について、次のように書かれている。

「さてもく仏因のまのあたりにしるし見ぬは」とて、一里又隣の里々にもいひさやめくほどに、法師はいかりて「いつはり事も」といひ、あさましく説法すれど、聞人やうく少く成ぬ。

（上田秋成「二世の縁」三五頁）

飯倉はこの場面について「ここに描かれているのは、仏教への懷疑が里じゅうに広がっていく過程そのもの、仏教への信仰崩壊の物語である」と指摘し、定助が「嘲笑の対象となった結果、村人たちが、仏教の教えに懷疑的になり、「里の法師が「いつはり事」と打ち消そうとしたのは、この主人の解説から広がった、捏造された愛欲因果譚である」と解釈した。では、「拾遺」の口語訳では、この原文に該当する箇所はどのように加筆されているのか、かなり長くなるが引用してみる。

「お寺で説教する因果の理りなどもこういう例を眼のあたりにみると信心する気が出ない」

と噂し合いこの里人ばかりか、近隣の村のまで檀那寺への布施を怠るようになった。

それを誰よりも気にしたのはこの村でも由緒ある某の院の住持である。

仏の方便の融通無礙の相はもとより末世の凡夫の推し量る由もないが、眼前の出来事のために仏徳の損われるのは見過しに出来ぬ。ともかくもかの定助の定に入つた時の様子を調べ

て、せめて愚夫愚婦の迷いを解かねばと思い立って、寺の「過去帳」を繰ったり、近隣の故老を洩れなく訪うたりして、仏前のつとめ業も怠るまでこの埋もれた事実を探り出そうと骨折ったが、「…」一層入定の僧の棺がどうしてそこに埋められたのかなど調べる道は絶え果てる次第であった。

「…」定助の過去についての不審は一向に晴れないのであった。

(三三七頁)

引用の際に省略を行ったが、作中口語訳は、原文で一行であった箇所をかなり加筆していることが分かる。この加筆で強調されているのは、定助の過去が「某の院の住持」が調べてみても一切不明だということである。「住持」が「寺の「過去帳」を繰ったり、近隣の故老を洩れなく訪うたりして」も「一層入定の僧の棺がどうしてそこに埋められたのかなど調べる道は絶え果てる次第」と強調されている。つまり、「拾遺」の作中口語訳「二世の縁」の方が原文「二世の縁」よりも主人の定助への「愛欲因果譚」の無根拠性を徹底的に露呈させているのである。

二、上田秋成「二世の縁」と作中口語訳の比較 (二)

次の引用は原文「二世の縁」の仏教への批判的な表現の一例である。

さても仏の教はあた／＼しき事のみぞかし。かく土の下に入て鉦打ちならず事、凡百余年なるべし。何のしるしもなく骨のみ留まりしは、あさましき有様也。

(上田秋成「二世の縁」三五頁)

亀井⁹は、この原文に該当する「拾遺」作中口語訳が「主人」の心理の側からこの事態をとらえている」と指摘した。亀井によると「さても仏の教えとは……」云々という「主人」たちの科白は、原作では作者秋成の批判的感情を述べた地の文で、「強いて作中人物の心理に関係づけてみるならば、「…」「母なる人」の悲観落胆をあらわす表現」であるにも関わらず、口語訳では「主人」のほうが掘り出された男(入定の定助)の様子を見て白けてしまったことになっている」と述べた。実際の作中の口語訳は、次のとおりである。

「さても仏の教えとは馬鹿馬鹿しいものだ。禪定に入って百余年も土中にあり、鉦を鳴らしつづけるほどの道心はどこへ消え失せたものか。尊げな性根はさらになく、いたずらに形骸ばかり甦ったとは何たることか」

と主人をはじめ村の中でも少しところある者は眉をひそめて話しあった。

(三三三頁。以降、傍線は引用者による。)

亀井の指摘は、確かに妥当であるが、「主人」以外にも「村の中の

少しところある者」も定助について「話しあった」のであり、この表現は加筆されている。村人も重要な役割を持つているだろう。この亀井の指摘した「主人」の心理の側からこの事態をとらえている」とは、野口裕子が作中口語訳と原文を比較し、その特徴を五つに分けた「1、読者に対する説明の付加。2、擬音語、擬態語、特に畳語の多用。3、「主人」という主語の意識的挿入。4、定助の俗物性を強調する表現の加筆。5、定助の性に関わる部分についての加筆。」¹⁰の「3、「主人」という主語の意識的挿入」だとも言える。

ここまでする踏まえ結論を先に述べるのであれば、先行研究で言及されてきた作中口語訳「二世の縁」の特徴である定助が性に執着する(した)という内容は、主人や村人たちが勝手にそのような性質を定助に付与した、という加筆なのである。しかし、これまで主人や村人らの作用については言及されてこなかった。この節では、定助自身の行動や言動が原文よりもその口語訳が性に執着したようには書かれていないことを明らかにしていく。この時の比較の補助線として野口の指摘である「5、定助の性に関わる部分についての加筆。」に焦点を当てて考察を試みる。

作中口語訳「二世の縁」は、全体的に原文からかなり加筆があるが、ここでは二つの場面に重点を絞って検討を行う。具体的には定助が村の後家の婿となつてからの村人の反応が描き出された場面と、婿になるまでの場面の二カ所を確認していく。ちなみに、本来の物語の順番では定助が婿になるまでの場面が先であるが、説明の便宜上、物語の時間の流れを無視する。また原文にはA、Bと付け、

それぞれの隣にa、bと付けた作中口語訳「二世の縁」の該当する箇所を比較のために並べる。

A「さてもく／＼仏因のまのあたりにしるし見ぬは」とて、一里又隣の里々にもいひさやめくほどに、

(上田秋成「二世の縁」三五頁)

a「なるほど、こうして見ると定助がこの世に甦つて来たのも謂あることだ。あの穴の中で昼夜をわかつた鉦をうち鳴らしていたのは一途に仏縁を願う尊い志とばかり思っていたが、さては浮世に今一度生れ変つて男女の交わりを果したい執念であったのか、さてさて気うとい願だ」

と人々は噂しあつた。

村の若ものなどは、定助とあの後家と抱きあうさまはどんなであろうと、わざわざ出かけて行つて、あばら家の板戸の隙間からのぞいて見ることもあつたが、別に化物が女と戯れている様子もなく、力ぬけして帰つて来た。

「お寺で説教する因果の理りなどともこういう例を眼のあたりにみると信心する気が出ない」

と噂し合いこの里人ばかりか、近隣の村のまで檀那寺への布施を怠るようになった。

(三三六―三三七頁)

B 定に入たる者ぞとて入定の定助と名呼て、五とせばかりこ、に在しが、此里の貧しきやめ住の方へ婿に入て行し也。

(上田秋成「二世の縁」三五頁)

b この村に夫にさき立たれて貧しく暮らしている傭があつた。これも少し足りない方に数えられている女であつたが、いつの頃か、かの入定の定助と親しくなつて、女の家猫の額ほどの畠を定助がせつせと耕したり鍋釜を裏の流れで洗っているのを見るようになった。もとより主人の家でも是非なく飼ひごろしにしていたことなので、このわけが知れると、その家の婿になるがよいと誰も誰も苦笑いしながらすすめて立てて、

(三三六頁)

a の加筆にある「浮世に今一度生れ變つて男女の交わりを果したい執念」、「噂しあつた」という表現から分かるように定助の性への執着という性格は「人々」の噂によつて付与されたのである。また、従来、須浪敏子が指摘するように「原文には無い、性への執着を強調する表現が追加され」¹¹た表現だと言われている原文の大幅な加筆でもある a の「村の若もの」が定助と後家の生活を覗き見る部分であるが、「別に化物が女と戯れている様子」はない。そもそも「村の若もの」らがこのような行動をしなければ定助が性的な存在だと理解されることがなかったのである。そのため「村の若もの」の行動によつて定助と性の結びつきがより強調されているのがここから

も分かる。したがつてこのイメージは「村の若者」らの勝手な妄想に過ぎないのである。

また、定助が後家の婿になる B の挿話自体は、原文と同じである。しかし b で加筆された傍線を確認すると「誰も誰も苦笑いしながらすすめて立て」たとあり、村の人々らが定助にこの後家の婿になるように仕向けた、という性をより強調して関係づけているのが分かる。実は、原文のタイトルでもある「二世の縁」というキーワードは、人々が定助について説明をする時、次の C のように使用されている。A と B と同じように隣に口語訳 c を示していく。

C 「彼の入定の定助も、かくて世にとゞまるは、さだまりし二世の縁をむすびしは」とて人云。

(上田秋成「二世の縁」三七頁)

c 「それでも定助は生れかわつて、妻を貰つたではないか、二世の縁を果そうとの仏の御思召しかも知れぬ」

とある人々は言つたが、

(三三八頁)

この場面については A から a や B から b のように大量の加筆はないが、口語訳も原文と同じように、いずれも人々が勝手に定助像を構築していることを示している。つまり作中口語訳における定助の性にかかわる表現とは、主人や村人が、原文よりも強調し、定助に

性への執着という特徴を与える加筆なのである。性に執着しているのは、むしろ定助以外の人物であり、原文と比べて定助の行動や言動がより性的なものとなっているわけではない。つまり、加筆による定助の性への執着は周囲の変化の方が強いのである。そして、そもそも原文でも「二世の縁」の定助は人々から、勝手に解釈され、説明されているのがAやCの傍線の部分である「いひさやめく」や「人云」といった表現から分かるため、作中口語訳ではそのことを徹底的に強調したのであった。

以上のように作中口語訳「二世の縁」の解釈は、二つあるといえるだろう。一つは、最初に確認した語り手の「私」が受容した定助は性に執着しているというものである。それに加えて、その根拠が主人や村人たちが勝手にそのような性質を定助に付与した、性に執着しているのは定助というよりも主人や村人の方だということである。このように確認すると「私」は、定助は性に執着しているという発生源となった主人や村人らの影響力に対しては、言及していないことが分かる。

三、「私」の語りの特徴——口語訳の叙述形態との関係を軸に

語り手の「私」は、主人や村人たちのセリフや会話によって口語訳「二世の縁」を定助は性に執着している物語として受容している。この物語を生成した主人や村人の定助へのあり方は、ある対象を一

方的に規定しているといえよう。これは、「私」という一人称形式の語りの性質とも響き合う。なぜなら「私」のあり方が主人や村人のように他者を勝手に規定する側であるからである。主人や村人たちの解釈をそのまま受け入れる「私」の姿勢は、自身の他者を規定する立場を露呈する。「私」の語りは、布川のみじめさを浮かび上げさせる。例えば、「私」は、布川の寢床について「うす汚れた枕」(三二九頁)、「敷布のうす汚れてけば立っている」(三二九頁)と語ったり、「先生の口述が殆ど自分の内心から滲み出す本来の声のような自然な響きにききとれる」(三三〇頁)と布川を上田秋成に重ねたりしている。これらは、全て「私」の認識であり、実際に布川がどのように思っているのかは「拾遺」で明らかにされていない。

一方で布川は定助と異なり「私」から規定される受身だけの存在としては語られない。例えば布川は、「私」を「いや、あんたはそうだろう……そりゃもつともだ、あんたも、二世の縁を結びたい方だものなあ」(三三五頁)と「私」を規定する言葉を持つ。以上のように口語訳「二世の縁」の外側に位置する「私」と布川の関係は、口語訳の物語の中の主人や村人たちと定助の関係とも響き合っているが、それは双方向的な側面もある。

この「私」と布川とのやり取りの間におかれているのが口語訳の全文である。「私」と布川の双方向的な関係を想定することで、この口語訳が「私」の語りに、何らかの影響を与えているといえるのではないだろうか。「私」は、布川が口語訳を「読経のはじめのような低い声でゆるやかに語りはじめた」(三三〇頁)と語る。そして、直

後に布川の口語訳である「二世の縁」が挿入される。しかし、それは、布川が「語りはじめた」(三三〇頁)とは一概にいけない叙述の形態で示されている。

ちなみに二節で確認したこの口語訳は、叙述の形態そのものについてはいくまでも考察がなされてきた。例えば、亀井はそのことについて「私」とその現代語訳者はほぼ同質の表現意識を持っていた¹²と指摘する。また須浪はそのことについて「私」と先生は、贋口語訳の共犯者と見られておかしくない同質性、性へのこだわりに結びつけられた人間同士¹³だと言及する。さらにそれらを発展させた論として藤木直実¹⁴は「言いよどみや言い直し、咳払いなども伴われていたであろうはずの布川先生の口述を、そのまま忠実に現前させたものではない」と指摘する。そして、作中の口語訳について「私」が書き取った、その筆記の引用であると考えられる」と結論づけ、「私」の判断のもとに、いくぶんの加筆や削除による再構成、〈編集〉をほどこしたことを意味してはいないだろうか」と結論づける。つまり藤木は、テキストに叙述されている布川の口語訳を「私」が編集したものであると指摘した。さらにこの解釈を引き継ぎつつ田村美由紀¹⁵は、「安易に「私」の筆記者としての優位性や支配性を断定することは避け」て、「私」の主体性が編み直されていく過程を」丁寧を追った。これらの論は、確かにこのテキストをジェンダー批評的に読む可能性を切り拓いた点において傾聴に値する。ただし、布川が「語りはじめた」(三三〇頁)というのが「私」の認識である。さらにそもそも発話を忠実に再現するのは、文字で

書かれたテキストでは、当たり前だができず、程度問題であろう¹⁶。そのため作中口語訳について確実に言えるのは、口述筆記という書き言的な要素がその前後の「私」と布川の会話の場面よりも強いということである。

そのためここで重要なのは、「私」が口語訳を布川が「語りはじめた」(三三〇頁)と語りつつも実際に続くその叙述の形態が「私」が把握した内容と相違があるという点である。言い換えると、布川が語った口語訳がそのまま再現されているのか、それとも「私」の編集が加えられているのかという区分ではなく、むしろ両者の文体がどちらか判断できないかたちで絡み合っているという関係こそが重要なのではないだろうか。むしろ、「私」の語りは、布川が「語りはじめた」(三三〇頁)と説明する文体と実際に作中口語訳として叙述された文体という二種類で生成されているのである。したがって、その語りが分裂し、二重化しているのではないだろうか。

すなわち「私」の語りによって、布川の口語訳をそのまま語っている可能性を持つ内容が生成されると同時に、「私」がそれを編集した可能性も生じるのである。「私」の語りは、このような媒介性を持つのである。以上のことからこのテキストの語り手は「私」であるが、その語りは分裂し、二重化するのである。

四、「恥かしい幻覚」(三四二頁)と結末の場面について

布川の家での口述筆記を終えた「私」は、駅に向かう道中で定助について「生々しく心に浮び上っていた」(三三九頁)と語る。その中で、上田秋成がなぜこのような話を書いたのか、定助の「性への執着」(三三九頁)について「作者は老耄した性欲の蛆のようにうごめく怪しさを暗示しているのではあるまいか」(三三九—三四〇頁)などと推論する。さらに、次のように布川と定助を結びつける語りを行う。

そう言えば、布川先生があんなに年の違うみね子を手に入れて、みね子も先生の生命の長くないことを勘定に入れてあの古びた家を既に自分の名に変えているなどという話も、どうやら定助と後家の関係に縁のないこともなさそうである。

(三四〇頁)

これは、作中口語訳の中で主人や村人らが定助の性についてセリフや会話を通して構築したというあり方と重なるだろう。ただし、主人や村人たちは定助について規定しただけでその影響は彼らには及ばなかった。それに対して引用したこの語りは、「私」に亡くなった夫との性愛の記憶を想起させる。そして、「私」は「子宮がどきりと鳴った」(三四〇頁)と語り、見知らぬ男に「危ないですよ」(三

四〇頁)と助けられる。藤木が「比喩的に言つてこの「男」は、「私」の中に甦った性欲が、具体的な男の姿をして現れたということが出来る」¹⁷と指摘した。この「子宮がどきりと鳴った」(三四〇頁)からはじまる「私」と男との対話が「恥かしい幻覚」(三四二頁)と関わる場面である。ここでも「私」の語りは、分裂し二重化しているのではないだろうか。

そもそも「子宮がどきりと鳴った」(三四〇頁)以降、テキストの最後まですべて、文末は「タ形」である。橋本陽介の研究を参照すると「タ形は、物語世界内部での現実の時間にその出来事を位置づける機能があるため、非現実的イメージの叙述などにはル形が使用されるのだと考えられる」¹⁸、「ル形にすることによって、物語世界内の現実の時間軸上に位置づけられないために、幻想的な印象になると考えられる」¹⁹のである。橋本の研究を参照することで「拾遺」(三四〇頁)以降に出現する男とのやり取りや、状況は現実的な時間であると考えられる。

以上のように「私」が、布川の家から帰る道で遭遇したこの「くらい道での恥かしい幻覚」(三四二頁)は、それぞれの文末が「タ形」で現実的な時間を示しているが、この場面の解釈は分かれている。具体的に大きく分けると、「子宮がどきりと鳴った」(三四〇頁)以降、男の出現も全て幻覚であるというものと、男自体は幻覚ではなく、その男に夫や布川、定助を見えるというのが幻覚であるという解釈である。

「子宮がどきりと鳴った」(三四〇頁)以降が幻覚であるという立場は、同時代評²⁰⁾の阿部知二が「ところで私によくわからないところは、小雨の降る竹藪で出たあのシーンは、幻想とか幻覚とか最後に書いてあるが、出てきた人間も全部幻覚なのか、それともただ夫だと思っただけが幻覚なのかしら」という疑問を提出し、丹羽文雄が「全体がそうだ」と述べたものがある。また野口は「つまり、この「子宮がどきりと鳴った」ことをきっかけとして幻覚の中に入っていくのである」²¹⁾と述べている。加えて須浪も「幻の男の手の感触」²²⁾として男を位置付けた。

それに対して田村は「見知らぬ男に亡夫、布川、定助という三人の男の幻影を重ね合わせる」²³⁾と言及しているため男を必ずしも幻覚とは捉えていないと思われる²⁴⁾。その他に、これらの中間の解釈である藤木は「結論から言えば、それはわからないという他はない」²⁵⁾という立場もある。

重要なのは、「私」が「恥かしい幻覚」(三四一頁)だと語りながらも、文体的には現実的な表現だというズレであって、このような混乱した「私」の語りの媒介性があるということである。つまり「私」の語りは、「タ形で現実の時間にその出来事を位置付ける機能」がありながらも、「私」の認識では幻覚だと語る「私」の混乱状態を示すのではないだろうか。あるいは、これを物語言説では「タ形」で語る「私」と物語内容を「恥かしい幻覚」(三四一頁)として語る「私」の分裂とも言える。これらは、「私」の混乱の状況を示しているのである。

そしてこの混乱の中「私は一目散にくらい中を走っている」(三四一頁)き、「駅前通り」(三四二頁)へと出た。「私」は、駅の改札口から出て来る「黒い外套の男の群れ」(三四二頁)を眺めている。その男たちは「一人一人鑄型でうち出されているように」(三四二頁)「私」には見えた。田村²⁶⁾は「一九五〇年代半ばの同時代状況に照らし、この男たちを「戦死した夫の〈ありえた姿〉かもしれない男性勤労者に重なるものとして読めるだろう」と指摘する。確かに同時代状況と結びつけることは可能だが、ここで確認をしたいのは、次のように私が見た「恥かしい幻覚」(三四二頁)との繋がりを想起させる結末の段落である。

入定の定助がこの男たちの中に生きているのを私はたしかめた。それはさっきのくらい道での恥かしい幻覚以上に、私の血を湧き立たせ、心を暖める不安なざわめきであった。

(三四二頁)

「定助がこの男たちの中に生きているのを私はたしかめた」(三四二頁)という叙述は果たして「私」は幻覚から醒めて、現実を見ているのだろうか。「私」は、男たちに定助との重なりを見ることで幻覚にとどまっているともしえる。確かに、文末の「タ形」により現実的な時間が示されているこの場面は、先の「恥かしい幻覚」(三四二頁)とは質が異なるかもしれない。しかし、駅の改札口から人が多く出ているにも関わらず、男性しか「私」の目にはうつらない。

加えて一人一人について、「私」の眼には個別性が浮かび上がらない。そもそも「定助がこの男たちの中に生きているのを私はたしかめた」(三四二頁)とはいったいどのようなようにして確かめたのだろうか。それは「私」の幻覚が続いていると解釈すれば理解可能である。つまり、混乱状況が継続しているのである。確かに、男たちの姿についての解釈は、同時代的な文脈で理解できるものの結局「私」が、「恥かしい幻覚」(三四一頁)に捉われたままなのである。

つまり、このテキストは「私」が物語内容を語る語り手と、物語言説を語る語り手とに分裂したままで物語が閉じるのであった。

おわりに

「拾遺」は、原文「二世の縁」の全訳を作中口語訳という形でテキストの中に取り込んだ。原文から大幅に加筆されたこの口語訳は、主人や村の人々が定助を規定する存在であることを強調した。主人が定助を規定する要素は、原文からあったものであるが、あまり注目がなされていなかった。そのため作中口語訳によって、原文「二世の縁」の新たな読みの可能性を開いたともいえるのである。

作中口語訳中の主人、村人と定助の関係は、「私」と布川の関係とも一部重なる。しかし、布川は「私」に一方的に規定されるだけの存在ではない。「私」は、布川から影響を受ける。例えば、作中口語訳は、布川が語ったものとされているためこの作中口語訳を語る「私」の語りはそれによって二重化し、分裂する。その語りの二重化

は、テキストの最後まで統一されることがないのである。

これまで「拾遺」は、作中口語訳の定助の性についての加筆を端緒として、「私」という女性の性を主題化したものとして位置づけられてきた。しかし「拾遺」は、原文と作中口語訳の関係を再考することで「私」の語りの二重化について表象したテキストとして捉えることができるのである。

(さいだ はるな・映像・表現文化論専修)

【注】

¹ 円地文子「二世の縁 拾遺」『文学界』一九五七年一月、六五頁。なおこの「追記」は、初取では削除されている。

² 田中愛「円地文子の上田秋成「二世の縁」受容——「二世の縁 拾遺」を軸に」『国文目白』四〇巻、二〇〇一年二月、二六〇頁。

³ 亀井秀雄「円地文子の世界 一古典借用——「二世の縁 拾遺」の場合——」、亀井秀雄・小笠原美子「円地文子の世界」一九八一年九月、創林社、一二二頁。その他に藤木直実も「以上のように布川訳「二世の縁」は、仏教の来世思想の崩壊を背景に、かつて入定僧であった男が、自身の性の問題を曝すことで所属する共同体との同化を果たすという構図となっている」と指摘している(藤木直実「円地文子「二世の縁 拾遺」——変容する「私」語り——」『会誌』一七巻、一九九八年三月、三一頁)。

⁴ 円地文子は、「高德の僧が、愚鈍な男に生れ変って、性欲を果すという設定は、秋成独特のもので、こういう物語は西鶴の諸国話などにも見られないようです。」と述べている(円地文子『江戸文学問わず語り』一九七八年九月、講談社。なお引用は円地文子『江戸文学問わず語り』

- 二〇〇九年一月、講談社、一九六頁による。)
- 5 飯倉洋一「第八節 いぶかしき世のさま」「二世の縁」私見——『秋成考』二〇〇五年二月、翰林書房、三五三頁。
- 6 飯倉洋一「第八節 いぶかしき世のさま」「二世の縁」私見——前掲書、三六一—三六二頁。
- 7 飯倉洋一「第八節 いぶかしき世のさま」「二世の縁」私見——前掲書、三六二頁。
- 8 飯倉洋一「第五章『雨月物語』『春雨物語』を読み直す」「上田秋成——絆としての文芸——」二〇一二年二月、大阪大学出版会、二二七頁。
- 9 亀井秀雄「円地文子の世界——古典借用——」「二世の縁 拾遺」の場合——前掲書、一一七—一二八頁。
- 10 野口裕子「第二章 古典受容の系譜——古典本文挿入から架空の古典創作へ——」「円地文子の軌跡」二〇〇三年七月、和泉書院、一〇一頁。
- 11 須浪敏子「二世の縁 拾遺」の構造分析——主題とテキスト・コード——『円地文子論』一九九八年九月、おうふう、一一三頁。
- 12 亀井秀雄「円地文子の世界——古典借用——」「二世の縁 拾遺」の場合——前掲書、一一九頁。
- 13 須浪敏子「二世の縁 拾遺」の構造分析——主題とテキスト・コード——前掲書、一一五頁。
- 14 藤木直実「円地文子「二世の縁 拾遺」——変容する「私」語り——」前掲書、三一頁。
- 15 田村美由紀「第5章〈媒体〉となる身体——円地文子「二世の縁 拾遺」——」「口述筆記する文学——書くことの代行とジェンダー」二〇一三年八月、名古屋大学出版会、一四二頁。
- 16 藤木直実は、布川の口語訳の再現ではないという理由の一つに「言いよどみや言い直し、咳払いなども伴われたであろうはず」指摘する(藤木直実「円地文子「二世の縁 拾遺」——変容する「私」語り——」前掲書、三一頁)。しかし、口述筆記において必ずしも言いよどみがある

とは限らない。例えば、津島美知子が太宰治の口述筆記を引き受けた時に「駆け込み訴え」の書記をしたときが一番記憶に強く残っている。「中央公論」に発表されるということで太宰も私もとくに緊張したのだろう。昭和十五年の十月か十一月だったか、太宰は炬燵に当たって、盃をふくみながら全文、蚕が糸を吐くように口述し、淀みもなく、言い直しもしなかった。(津島美知子『回想の太宰治』二〇〇八年三月、講談社、四三頁)と述べている。そのため布川の口述が再現されている可能性もありえる。

- 17 藤木直実「二世の縁 拾遺」試論——〈性〉の発見・〈生〉の獲得——『国文目白』三五卷、一九九六年二月、一〇二頁。
- 18 橋本陽介「13. 物語の特殊用法」「物語における時間と語法の比較詩学——日本語と中国語からのナラトロジー」二〇一四年九月、水声社、一九九頁。
- 19 橋本陽介「13. 物語の特殊用法」前掲書、二〇一頁。
- 20 阿部知二・丹羽文雄・高見順「創作合評」『群像』一九五七年二月、二四一頁。
- 21 野口裕子「第二章 古典受容の系譜——古典本文挿入から架空の古典創作へ——」前掲書、一〇六頁。
- 22 須浪敏子「二世の縁 拾遺」の構造分析——主題とテキスト・コード——前掲書、一二二頁。
- 23 田村美由紀「第5章〈媒体〉となる身体——円地文子「二世の縁 拾遺」——」前掲書、一四八頁。
- 24 なお先行研究を引いて「男の幻影」とも説明がなされている。注17と同じ。
- 25 田村美由紀「第5章〈媒体〉となる身体——円地文子「二世の縁 拾遺」——」前掲書、一四八—一四九頁。
- 26

※円地文子「二世の縁 拾遺」の引用は、『円地文子全集』第二卷(一

九七八年七月、新潮社）による。

※上田秋成「二世の縁」の引用は、『春雨物語』（漆山本）（一九五〇年四月、岩波書店）による。

※「…」は省略を示す。